

トカラ列島中之島御岳の噴気活動

福澄孝博¹・木下紀正²

¹十島村歴史民俗資料館・TOKARA 中之島天文台, ²鹿児島大学教育学部教育実践総合センター

Fumarolic activity of Nakanoshima-Otake Volcano in Tokara Islands

Takahiro FUKUZUMI¹ and Kisei KINOSHITA²

¹TOKARA Nakanoshima Astronomical Observatory & Toshima-mura Folklore Museum, ²Kagoshima University

トカラ列島(鹿児島郡十島村)の中之島は中新期琉球火山脈に属し、その最高峰御岳(おたけ: 979m)は噴気を上げ続ける活火山である。近年では 1914 年 1 月に小噴火を起こし泥土を火口周辺に降らせ、1949 年 10 月と 1973 年には山頂から多量の噴煙を放出した記録がある。山頂火口内には硫黄採掘場の跡があり、かつては重要な産業のひとつであった。また、東斜面中腹にも噴気を上げ硫黄分で黄色く変色した部分があり、長く雲がかかった後に晴れると硫気でただれて茶色になっている。以前はここでも硫黄が採られた。

薩南諸島の火山災害対策では鹿児島県は薩摩硫黄島・口永良部島・諏訪之瀬島とともに中之島を含め、御岳噴火を想定した避難訓練や新たなヘリポート設置を行っている。集落の大部分と中之島港は急峻な御岳の麓、山頂から約 2.5km にあり、住民の防災意識が高まってきている。御岳の活動の定常的観測が望まれるが、気象庁では中之島をランク B として常時観測火山に含めていない。海上保安庁海域火山データベースには中之島の項に飛び飛びの観察結果が発表されている。

常時観測の空白を埋める一助として、ここでは中之島御岳の噴気活動の推移を 2003 年 7 月から 2006 年 3 月撮影の写真に基づき報告する。福澄は 2002 年 4 月の中之島赴任時より風景写真として御岳を撮影し続けてきたが、その頻度は 2005 年 9 月から増大している。撮影された写真は①噴気が写っている(上昇するもの、吹き降ろされるものなど)、②噴気が無くすっきり晴れている、③雲がかかり頂上付近が確認できない の 3 種に分類できた(但し、元もと噴気に注目して撮影してきたので、②の場合には撮影しなかったことが多いというバイアスがある)。噴気は水分主体の白煙なので、雲が立ち上っているように見える場合には噴気との区別は前後の写真との比較などして慎重を要する。噴気の源は山頂火口内か東斜面中腹の噴気孔である。図 1 は勢いのある噴気、図 2 は

火口縁から吹き降ろされる場合、図 3 は東斜面中腹の噴気である。福澄の住居・職場からは見えない東斜面中腹噴気孔の撮影機会は少ないが、ほぼ常に噴気をあげていることが分かった。海上保安庁データベースと比較すると、**a.**火口部を覗き込むアングルではないが噴気の確認には十分、**b.**撮影頻度が圧倒的に高いと云える。



図 1. 南の東区温泉から見た御岳と山頂火口の噴気

(2003 年 10 月 30 日 16:21)



図 2. 南東の中央台地から見た山頂火口の噴気

(2005 年 11 月 23 日 13:17)



図 3. 東南東の御池から見た御岳と東斜面中腹の噴気

(2006 年 2 月 24 日 11:49)